

まうのです。

「どうするラルス。」

「ううん、だいじょうぶよ。ノルランドの人間はごえなんかしやしない。わたしは去年の冬は、おとなの人といっしょに山の中へくまをうちにいって、四晩も五晩も、雪の中へ寝たけれど、へいきだった。わたしがちゃんとよくするから、さわがないでね。いつかうちの父さんがストックホルムから来たお客さまについていって、やつぱり、こんなふうに夜、雪嵐の中で道がわからなくなったことがあるの。そのとき父さんがしたとおりを、これからすればいいんです。」とおちつきはらって、こういいます。

「つまりどうするんだ。」

と、わたしは、息づまるような雪嵐に顔をそむけながらいいました。

「だいいちばんに、アキセルをはなして木の下へつなぐんです。てつだつてね。」とラルスは、馬のくらをとりはずしにかかりました。わたしも手だすけをしましたがこのいうくらがりの中で、雪にしめりぬれたかわひもなぞを、いちいちはずしてくらをときおろすのは、なかなかよいうなことではありません。やっと、それがすみますと、ラルスは馬をはずしてそばのみみ

木のところへつれていき、杖の下へいれこんでつなぎ、その中からとないの毛皮を一枚もちだして、馬の背中へかけました。それから、ほし草をひとかかえ持つてきてあてがいました。馬はまんぞくそうに、もぐもぐと食べはじめました。ノルランドの馬は、こんな寒気の中でもごえないようになれきっているのです。

ラルスはそのつきには、その中のほし草を、たいらにならして底へしき、その上へ、ありたけの毛皮を、風にふきとばされないように、しっかりと、ほうほうをくくりとめて、すきまのないようにぎっしりかけならべました。

ラルスはその、いっぽうのはしを、めくりあげて、

「はい、がいとうをぬいで、ここからおはいりなさい。中へしいて、その下へもぐりこむんです。」

わたしは命じられるままにがいとうをとりました。そのときには、ぶるぶると、からだじゅうがちぢみあがるほど寒かったのですが、そのの中へもぐって、その毛皮のがいとうの下へはいると、すっかり雪嵐からのがれて、ほっとした気持ちになりました。

「ここを、めくって。」というので、すわったまま、はずかいに手をのばして上の毛皮を持ちあ